文學の使命

――卷頭言――

吾々は文學を味つたり、學んだりすることに依つて、吾々の性行風格を修成し、各國の國民性を知り、遠く古人の肺腑に入つて、其の思想に遊ぶことも出來る。而し其の目的こゝにありとするものあらば、まことに以て卑下淺薄なることを悲しむものである。

文學は、今少しく吾々の日常生活の上に、影響を及ぼして居ることを知らなければならない。英國の文學者ベンネットは『文學研究は閑の時間を慰める爲ではない。それは快樂、同情、認識に對する、人間の職能を活潑ならしめる。それは一時間を感動させる爲ではなく、廿四時間を感動させる爲である』と云つて居る。

文學に盛られたる事物の心情は、他物を忖度する吾等の同情心に訴へ來て、悲哀なる物語、悲哀なる詩歌でさへも、吾等に快樂興味を與へんとするものである。

又文學は人間の心の微細なる影までも、捉へ來つて之を明示し、愛や、正義や、自由の美をも、眞に認識せしめるのである。そうして熱情的に、眞面目に、すべてにはげしさと、力强さとを以て、吾等に迫り、吾々の心の奥底までも衝き動すのである。

而し文學はこれを以て、自らの理想を達し得たりとするものでなく、更に進んで、吾々を俗界の悲より脱し、超自然界に出入せしめんとするものである。喧々囂々の俗界の汗を流し去り、想像の樂園に入らしめる所、こゝに眞の文學の使命があるのではなからうか。

『羽蟻飛ぶや、富士の裾野の小家より』

只これだけの句に、吾々の胸に璆鏘の音は響き、春風駘蕩の光景が浮び出で、超自然界に遊ばしめるではないか。かくしてこそ、吾々の日常生活は、初て眞善美化せらるゝいである。

――（岳南生）――